コメント：「進化・宗教・国家」をめぐる三つの問題系

大谷　栄一

1　三人の報告の位置づけ

本シンポジウムは、「進化・宗教・国家」をテーマとするが、「進化論と宗教」「宗教と国家」「国家と進化論」の問題系に分節することが可能であろう。クリントン・ゴダール氏、田中友香理氏、李セボン氏の各報告の力点をこれらの問題系に即してまとめると、次のように位置づけることができるのではないか（ただし、三人はそれぞれの問題系、「進化」「宗教」「国家」の相互連関性に言及している）。

進化論と宗教→クリントン・ゴダール

宗教と国家→李セボン

国家と進化論→田中友香理

今回の三人の報告は、それぞれの事例から、これら三つの問題系に関する新たな視点を提示した成果として捉えることができよう。

2　三報告の主要論点の整理

上記の位置づけをもとに、まず、三報告の主要な論点を整理する。三人の報告は、各自の単著（ゴダール［二〇二〇］、田中［二〇一九］、李［二〇二〇］）にもとづいているため、これらの成果も参照しつつ、以下、私の専門で

ある近現代日本宗教史の観点からコメントしたい。

まず、ゴダール報告では、日本における進化論の受容史の解明がめざされた。その内容は、近現代日本の進化論に関する「定説」を根底から捉え直すものだった。

ゴダール氏は進化論の政治的・宗教的・思想的な多面性を指摘し、とくに進化論思想（科学思想）と宗教思想の展開をめぐっての相互作用――単著の言葉を借りれば、「宗教と進化論の相互作用」（ゴダール［二〇二〇］：一三頁）――に注目している。

また、政治的・イデオロギー的な側面として、「社会進化論」という用語の問題性、進化論と国家イデオロギー間の緊張関係を指摘している点も重要である。

ゴダール氏によれば、日本における進化論に顕著なのは、生物学を社会学に応用することではなく、「社会・政治的な理念の、自然への送り込み」である（同：三一三頁）。くわえて、ダーウィンによる世界の脱魔術化＝世俗化に対する「自然の再聖化」（同：三〇四頁、三一二頁）であるという。ゴダール氏はそこに「進化と宗教の共働」（同：三一二頁）を看取する。

次の田中報告では、加藤弘之の思想を事例とした明治国家と社会進化論の関係が詳細に分析された。とりわけ、加藤の社会進化論にもとづく国家思想の変容（その進化論は「優勝劣敗」→「天則」→「自然」へ）が明示された。

田中氏によれば、「加藤は自然科学に拠って生涯唯物論と無神論の立場を把持し、（中略）自然科学は彼が拠って立つ唯一の基準であった」（田中［二〇一九］：三〇五頁）。ただし、興味深いのは、そうした立場性に立つ加藤の宗教観である。田中氏は、明治二七年（一八九四）に加藤が体験した不思議な夢の逸話を紹介し、加藤が「神代ノ神ヲ信スルモノニアラス」と記したことに注意を促す。神勅にもとづく近代日本国家の統治の正統性に疑問を呈し、天皇の「神」性を歴史に求めた加藤の国家思想の特徴が摘出された。

さらに、国家統治の正統性を社会進化論から導かれた「自然」によって基礎づけ、明治末年～大正初期の国体論を否定する加藤の思想の可能性を指摘している。

最後の李報告は「儒者」としての中村正直の「天」をめぐる思想を分析し、中村による宗教と国家の捉え方を明らかにしている。

中村には儒者の姿勢が一貫しているが、その思考には留学体験や明治維新の影響による変化がみられるという。その国家観は、伝統的な儒学の統治観から、西洋諸国の国家観に共鳴し、「人民」が統治の主体となるビジョンへと変化した。

また、その「教法」観について、こうまとめる。中村をはじめ、明六社同人ら明治初期の知識人は、人民全体の道徳的な向上を前提とした文明開化を実現する手段として教法を捉えていた。教法は日本の文明開化のための有効な手段であり、こうした教法理解の背景には、儒学の経書理解に基づく世界観があったと指摘している。

さらには、その「教法」概念は「キリスト教や仏教によって想起される現代語の宗教観念に近い意味を有しつつも、一方で（中略）儒学的文脈における「教」の意味をも色濃く帯びる」ものであったという指摘も確認しておこう（李［二〇二〇］：二一六頁）。

3　三人の報告から浮かびあがる論点

ここで、以上の三者三様の刺激的な報告から浮かびあがった論点を、上記の三つの問題系に即してまとめ直すことで、三人の報告の関連性を示してみたい。

(1)進化論と宗教の問題系――「自然の再聖化」、汎神論の問題

ゴダール氏の研究によって、「近代日本における進化論の受容や変貌や波及の過程に、宗教は決定的な影響を及ぼした」ことが明らかになった（碧海［二〇二〇］：三二〇頁）。その影響としてゴダール氏が挙げるのが、前述の「自然の再聖化」である。明治の仏教者たちは、ダーウィンの進化論が引き起こした世界の脱魔術化＝世俗化による不安に対して、「自然の再聖化」を図った。それは自然を「意味、善、そして神を包み込んだ場所として想像し直そうとした」営為であった（同：一五八頁）。進化論が宗教思想にとって代わったり、世俗化の推進力になるというわけではなく、進化論を一方的に拒絶するわけでもない。受容しつつ、それを流用することで、「世俗化（ここでは特定の宗教思想の衰退を意味する）と再聖化は同時に起きる」事態が生じたと断じる（同：三〇六頁）。

この指摘は重要である。進化論の受容が、世俗化と再聖化を同時にもたらしたという見解は従来の世俗化論を刷新するとともに、日本の近代化に対する新しい視点を提示している、と評価しうる。

その「自然の再聖化」のポイントは、「進化論の汎神論的な解釈」（同：五六頁）にあるのではないか。ゴダール報告では、井上円了の『破唯物論』（一八九八年）が取り上げられ、「宇宙全体もまた一活物なり」との円了の見解が紹介されている。これは円了の「真如」観の表明であり、汎神論を意味していた（ちなみに加藤弘之は、この

書物に対して「破破唯物論」という反論を発表している）。

進化論がもたらした思想的インパクトとして汎神論を捉えることで、エマソンやユニテリアンの汎神論とも関連し、ゴダール報告は李報告と接続することになる。

(2)国家と進化論の問題系――進化論と国家イデオロギー間の緊張関係の問題

この問題系は、田中報告とゴダール報告に関連し、とりわけ、進化論と国体論の関係をめぐる問題に顕著である。田中氏が加藤弘之の国家思想と国体論の緊張関係を考察している。田中氏によれば、加藤は社会進化論から導かれた「自然」によって立憲君主制も国体論も基礎づけようとして、国体論の「神」を受け入れることはなかったという。

この進化論と国体論の軋轢の問題は、明治・大正期にとどまらず、昭和前期までみられたことは、ゴダール氏の報告に明らかなとおりである。この問題は、田中氏の指摘する近代日本国家の統治の正統性、天皇の「神」性にも関わるきわめて重要な論点である。なお、ゴダール氏は、日本での進化論と国家イデオロギーをめぐる歴史の最も逆説的な事実として、「天皇裕仁その人が、生物学者でもあった」ことを挙げており（ゴダール［二〇二〇］：二四三頁）、近代天皇制の問題にも深く関わる論点であろう。

(3)宗教と国家の問題系――「宗教」と儒学の問題

晩年の中村正直が直接整理した「敬宇文庫洋書総目録」には、キリスト教や religion について論じたものが多い、という李氏の指摘は興味深い。「儒者」としての中村における「天」の実在への信念と「教法」（キリスト教）の信仰の両立、さらには国家との関連をどう捉えるか。李氏によれば、明治期以降の中村は「天」の実在を信じさせるために「教（法）」が必要で、それにより共同体構成員の道徳的向上が実現し、「文明」国になれる、と考えていたとまとめる。

ここで問うべきは、はたして「宗教」とは何か、という問題である。この問題は、一九九〇年代後半以降の日本の宗教研究で「宗教」概念批判研究として議論されてきた。religion の訳語としての「宗教」は明治十年代に一般化するが、西洋の religion 概念には個人の内面的な信仰を基調とするプロテスタンティズムの影響が強い（磯前［二〇〇三］）。

ただし、日本の「宗教」概念批判研究では、儒教についてはほとんど言及されてこなかった。その不備を指摘

したのが、（李氏も参照している）渡辺浩［二〇一六］である。明治初年の「教」とは「何よりも、当時の多くの知識人の基礎教養、儒学での意味であろう」、と渡辺は述べる（同：二七五頁）。

李氏によれば、中村がキリスト教に言及する時には「教法」を用い、「宗教」が翻訳語として定着する明治十年代からは「宗教」と併用したという（李［二〇二〇］：二〇一頁）。中村の「教法」概念が「儒学的な思考」（同：二一五頁）に根ざしていたとすれば、宗教と国家の問題系は、儒学と宗教と国家の問題系へと拡張できるであろう。

李氏は、清末の厳復と朝鮮末期に生まれた朴殷植を取り上げ、二〇世紀初めの清国と大韓帝国における儒学と進化論の融合を紹介している。ここから、近代東アジアにおける進化論の受容史という課題を設定することができ、さらにはゴダール氏のいう進化論のグローバル・ヒストリーも展望することもできるであろう。

三人の今後の研究の深化に大いに期待したい。

参考文献

磯前順一［二〇〇三］『近代日本の宗教言説とその系譜――宗教・国家・神道』東京大学出版会

碧海寿広［二〇二〇］「訳者解説」（ゴダール［二〇二〇］）

ゴダール、クリントン［二〇二〇］『ダーウィン、仏教、神――近代日本の進化論と宗教』碧海寿広訳、人文書院。原著二〇一七年

田中友香理［二〇一九］『〈優勝劣敗〉と明治国家――加藤弘之の社会進化論』ぺりかん社

李セボン［二〇二〇］『「自由」を求めた儒者――中村正直の理想と現実』中央公論新社

渡辺浩［二〇一六］『増補新装版 東アジアの王権と思想』東京大学出版会

（佛教大学教授）